

## 薬草だより

## 橋本竹二郎の植物画紹介

## その9

樋口 剛央\*

チョウセンゴミシ (マツブサ科)

*Schisandra chinensis* (Schisandraceae)

生薬名：五味子 (ゴミシ)

花期は5～7月。淡黄白色で直径約1.5cmの鐘型の花は、雌雄異株の単性花であり、葉腋(葉の付け根)に束になって下向きに付き、芳香がある。山野に自生するつる性の落葉性木本で、植物名にチョウセンとあるが、日本にも自生しており、北海道から本州の北・中部、朝鮮半島、中国などに分布している。果実を薬用部位とする。果期は8～9月であり、直径5～7mmの球形で成熟すると深紅色になる。五味子の名は甘味、酸味、辛味、苦味、鹹(塩辛い)味の五味を持つことに由来する。中国では北五味子ともいい、同属植物の*S. sphenanthera*の果実である南五味子と区別されている。中枢抑制、鎮咳、抗炎症、抗アレルギー、抗ストレス、疲労回復、筋弛緩作用などが報告されており、小青竜湯、清暑益気湯、人参養榮湯、味麦地黄丸、苓甘姜味辛夏仁湯、苓桂味甘湯などに配合される。



トウガラシ (ナス科)

*Capsicum annuum* (Solanaceae)

生薬名：番椒 (バンショウ)

花期は7～9月。白色の花が葉腋から単独または2、3個生じる。南アメリカを原産とし、熱帯では多年草または低木になるが、日本のような温帯では一年生草本である。果実を薬用部位とする。花の後に上向きに付き、熟すと通常は赤くなる。香辛料として世界中で食用とされており、観賞用にも栽培される。このため、品種

が非常に多く、形状は球状から長細く、黄色や紫色に熟すものや、大きさや辛さも様々であり、ピーマン、パプリカ、シシトウも栽培品種の1つである。なお、沖縄のシマトウガラシ、タバスコペッパーなどは同属植物のキダチトウガラシ*C. frutescens*の栽培品種である。薬用には辛味の強い品種が用いられる。皮膚刺激薬に用いられるトウガラシチンキの原料であり、胃腸薬の配合剤として微量の粉末が用いられることがある。



橋本竹二郎

松浦薬業株式会社顧問

来歴

1931年東京に生まれる。

牧野富太郎氏らと親交。津村研究所(現ツムラ)、名城大学薬学部、富山大学和漢薬研究所のほか、複数の製薬会社の顧問等を経て、現在に至る。

主な著書

「立山路の花しるべ」(共著、巧玄出版、1977)、「北陸の自然誌」(里見信生 編著、巧玄出版、1979)、「目で見える薬草百科-見分け方・採取時期・薬効と使い方」(永岡書店、1984)、「薬草・花を描く-ハーブドローイング植物画を楽しもう」(日貿出版社、1994)ほか